

近世日蓮宗の仏教文化史上の意義

杉山 二郎

はじめに

昨年度の当大学院大学で開催された公開講座に、わたくしも講師の一人として登壇して、江戸時代の仏教事情の一端と口承文藝との関連について論述したことがあった。現今巷間に持て囃す江戸ブームに肖ったわけではなかったが、浮世絵研究者の小林忠氏、江戸文事の専門家延廣真治氏の驥尾に附して、仮染めにこれらの人たちにとっての研究範疇に関わる筈の宗教事情、仏教事情の導入案内の役目を果たしたつもりであった。わたくしも若年の砌浮世絵版画美術に親炙傾倒したこともあったし、また江戸期の文事には馬琴、種彦、遡っての西鶴、近松の門檣を窺った機縁のみならず、頗る寄席藝を好んだので、彼の人たちの驥尾に連らなつたのである。その折例の如く話柄は時代切れとなつて首尾一貫しなかつたため、この機会を借りて纏りを著けてみたいと思う。

平川彰先生の追悼号にこうした話柄が果して適當であるか否か頗る心許ないが、弁疏すれば、先生の門下生の一人に望月日翔師（柴又帝釈天題経寺の管主）が居られ、その機関紙「柴又」に先生は屢々執筆、対談せられており、わたくしも管主の眷顧を蒙つてその紙上にも登場している因縁があった。先生は東大印哲の教授であられたが、わたくしは美学美術史料に在つて殆んど全く御縁がなかったと云つてよい。この大学院大学にわたくしを

聘致せられたのは先生と故鎌田茂雄氏との推挽によると聴いている。その五年間は先生を理事長として麾下に在りはしたが、何らお役に立っていない点、忸怩たらざるを得ない。仏教文化学が学問として成り立つものやら頗る覚束ないが、柴又帝釈天の題経寺が日蓮宗であることから、彼の寺院の近世江戸期の天明浅間山噴火の災害と、飢饉天災を機に、多くの信徒を獲得して庚申待ちの行事を中心に近隣に鳴り響いている。江戸時代の日蓮宗の盛衰帰趨について且て注意を払ったことが皆無であった。今平川先生の追悼号に、江戸期の仏教事情のなかで日蓮宗の動向を軸点に、仏教文化学の視座の元に眺めてみることを思い立った。周知の如くに題経寺本堂の外壁周囲には、江戸木工細工師の流れを汲む職人藝になる法華経変相浮彫りが十面飾である。大正期から昭和初頭の巷間謂う所の宮大工、木工師の手になるものであるが、工藝感覚の冴えと自在な彫刀の扱いは頗る興味深い。この作品を中心として法華経変相図の起源及び展開の問題も、先生追悼の文に適わしいが、今回はこれらをも視野に容れた江戸文事のなかの日蓮宗文化について論及することとした。果して先生の御霊が拙文を嘉納せられるや否や、甚だ心許ないけれど筆硯に向ってみることにしよう。

一、日本仏教史上の江戸時代の仏教

仏教美術史の研究上、その造形作品の起源及び展開の上でも、飛鳥、白鳳、天平、平安前期（弘仁・貞観）、藤原期、藤末鎌初（院政期）、鎌倉期、室町期、江戸期と別けて論じられてきた。〔例えば、すこし古い戦前の刊行物ながら、「日本美術史大系、彫刻」（昭和十六年二月誠文堂新光社刊）所収、小林剛氏執筆、総説の「時代区分」は便利であり参照せられたい。〕政治史や思想宗教史の時代区分と必ずしも同一の概念で括るわけにはゆかない。唯中世以後、鎌倉時代から室町時代にかけて宗教美術の造形活動が、世俗美術の台頭と隆盛に伴って絵画、

彫刻の分野では一頓座をきたして、余り見るべき遺品を創造し得なくなった観がある。南都興福寺を中心とした椿井仏所、富士山仏所、宿院仏所がその余喘を保つに過ぎず、江戸期は仏所が仏師屋に墮して殆んど造形美術活動の場は寺院から市井の野の仏へと移遷して僅かに垣間見られるに到った。木喰上人、円空聖ら彷徨流浪の仏僧の庶民相手の作品が、近現代に注目されるに留まっている。そのため江戸時代は絵画で謂えば、室町の詩画軸の流れを汲む狩野派、倭絵の系譜からする土佐派、一方京都町衆の四條丸山派、装飾画の宗達・光琳、また大雅、蕉村からの文人画、庶民美術の浮世絵が妍を競っているが、寺院はむしろこれら美術活動の展覧会場の域に迄墮したと云えるかも知れない。そのためもあって美術史では、江戸期の宗教美術は一部建築を除いて、不毛の時代と見做されてきたと云って過言ではあるまい。

しかし宗教活動、思想史の分野では、江戸時代をそのように軽々しく取り扱ってはいない。例えば辻善之助先生の広翰なる「日本佛教史」十巻のうち江戸時代は三冊に涉っていて、第八卷近世篇之二から江戸時代が記述されている。南都六宗から天台宗、真言宗、さらにその天台宗から鎌倉新仏教たる法然の浄土教、親鸞の真宗、日蓮の法華宗、道元の曹洞宗、栄西の臨済宗が輩出分派して夫々教権を国民の各層に拡げ、職能身分階級に応じた信者層が形成されて行った。法然浄土教の流布は布教弾圧により地方、特に新潟、瀬戸内の農民漁労民に及んだが、真宗は日本海沿岸の農民層、また東国の農民層に多くの支持者を持った。曹洞宗も福井の永平寺を中心に在地武士層と郷土層を、臨済宗は京都・鎌倉の公家層と幕府の要人たちを信者として獲得していた。吾が国の中世・そして近世をどのように時代区分するかの問題を政治史、社会経済史の視点によって画期する時、政権担当者の興亡か、身分階層の台頭没落現象（例えば津田左右吉氏の「文学に現はれたる我が國民思想」の如く、貴族文学の時代、武家文学の時代、平民文学の時代の画期など）また隣のシナの時代区分で京大東洋史の諸先生によって指摘された宋代（建隆元年、A.D.九六〇年庚申より創建）からを近世とする見方からすると、十世紀後半は吾が国

の延喜天曆の治の後期に入って中世初頭に当たっていることになる。わたくしもこの響みに倣って、白河天皇が應徳三年丙寅（A.D.一〇八六年）の院政開始を以て中世の終焉、近世期に推移すると考えている。院政期の仏教事情について最近速水侑編「院政期の仏教」（平成十年二月、吉川弘文館刊）の佳著が現われた。一遍、空也らの念仏聖の出現は貴族仏教から庶民仏教への黎明を告げる暁鐘であり、一方大江匡房著わす「遊女記」、「傀儡子記」、「洛陽田楽記」に登場する衆庶は、近世的性格を帯びて活躍している時代風潮こそ見逃せないからである。

勿論、絵画美術の名品「信貴山縁起絵巻」や「伴大納言絵詞」更に「鳥獣戯画丙巻」のなかに活写された庶民の姿は「源氏物語絵巻」にみる引目鈎鼻のステレオ型の剛一造形とは全く撰を異にした、喜怒哀楽、驚慟乱舞の生きた人間姿態の登場を見るに到っているのからも、近世胎動が始まっていた。鎌倉時代をルネッサンス、ないし宗教改革リフォーメーションと喚ぶヨーロッパ尺度の応用は、近世への歩調と見做されても来たものではあったが、天台宗から鎌倉新仏教の首唱者が多く輩出していて、念仏にせよ座禪にせよ、天台教学の一部を強調鼓吹したことは競えない。

日蓮の、「南无妙法蓮華経」の題目唱呼も「南无阿弥陀仏」の念仏と表裏の關係にあった。これら唱名念仏、唱名題目の易行道が時の権力者執政者（その背後に比叡山延暦寺座首たる貴族皇族とその支持者）が忌避嫌悪するための弾圧を強く蒙ったこと、逆に庶民農工商階級の支持に多くの影響を与えている。平重衡による南都焼討は既成の南都六宗の牙城、東大寺と興福寺を根刮ねかくに灰燼に帰せしめたが、その象徴たる東大寺毘盧舎那金銅仏が、後白河と源頼朝の示指の元に、重源上人を勸進聖総元締として全国規模の勸進システムを活躍せしめて、美事に再興せられた。この大衆勸進システムの知恵は、当時の宋代寺院造営の際に機能していたもので、入宋僧の多くがその現実の姿を目撃していたに違いなく、重源や栄西にも御他聞に洩れなかった故に、いち速く復興造営責任者として指名されたのであったろう。南都の法相宗、華嚴宗の活性化に果たした役割りのなかで慶派の棟梁たる運慶と同僚の快慶、慶派二代目の湛慶、また定慶、三代目の康弁・康勝らの造仏活動として、鎌倉新様の仏像彫刻

として遺っている。重源、栄西と大仏復興事業が南都の注目を集め、西大寺の真言律宗の開祖興正菩薩叡尊による造寺造仏事業に、そのまま大衆勧進システムが利用されて、今日の赤い羽根募金のその如く、一仏像に五千人ないし一万人の勧進による基金の造立像が多く見られた。この種の造像例については、拙著「日本彫刻史研究法」(一九九一年六月、東京美術刊)の中世篇諸論文、参照。此処に附言するが、鎌倉期造像例を全て中世の枠に入れて論じているが、既上記のように近世と訂正したい。尚高知女子大学助教授の青木淳著「遣迎院阿弥陀如来像内納入品資料」日文研叢書19(平成十一年三月、国際日本文化センター刊)も必読の研究である。

鎌倉新仏教のなかで、念仏宗にせよ真宗にせよ、曹洞・臨済の禅宗も、また日蓮の法華宗にも彼らの寺院造立は在りはしたものの、建築物を除いての造形活動の遺品に見るべきものが少ない。多くが焼失するか江戸期に入っでの再建遺構の故もあり、障屏画、家具調度、庭園池沼の類に留っている。昨年十月から翌十一月十六日迄大津市立博物館で開催された「企画展、比叡山麓の仏像」展覧会は、わたくしの興味関心を頗る唆った。四十五点の所謂天台系の彫像であったが、館員諸氏を中心とした元成七年から十年に涉って行われた「延暦寺里坊等未指定彫刻調査」の成果であって、わたくしの管見から全く洩れていた作品群からなっていたのである。調査の分類に従って、(1)坂本里坊伝来の仏像、(2)比叡山麓の諸寺院に伝来した仏像、(3)比叡山上伝来の仏像―三塔十六谷別所―として陳列されていて、叡山の東塔・西塔・横川の衆徒の抗争焼討の戦火に対して、所謂「疎開仏」ポータブルな持ち運び自由な像高と像容をもつ作品が、一朝事態発生の際、西麓の大原と東麓の里坊ないし更に船を仕立てて琵琶湖東岸に疎開し、保護され伝世した作品群と、東塔の山王院伝来の木造千手観音立像(九世紀)木造四天王像二軀(九世紀)横川飯室谷伝来の木造観音菩薩立像(九世紀)を中心とする像高一メートルを越える移動の難しい彫像群に岐れていたのが注目される。これら移動の困難な彫像の優品が叡山上に在ったことは、わたくしを瞠目聳動せしめた。信長による叡山焼討の伝承が悩裏にあるからである。太田牛一が、「信長公記」

（奥野高広・岩沢愿彦校注本、昭和四十四年十一月、角川文庫版）卷四元龜二年辛未（A.D.一五七一年）九月十二日の條に、「叡山を取詰め、根本中堂、三王廿一社を初め奉り、靈仏、靈社、僧房、経卷一字も残さず、一時に雲霞のごとく焼き払ひ、灰燼の地と為社哀れなれ」と記し、亦辻善之助先生は「日本佛教史上之研究」（大正八年九月、金塔堂書籍株式会社刊）、十二、戰國時代の佛教、織田信長と佛教の項目でも、「信長が佛教徒に對した最も著名なるものに就いていへば、まづ第一に、彼叡山焼打ちの事件でありますが（中略）永祿十二年、延暦寺の江州の寺領を取上げた事があります。此時山徒の連中は大に憤って朝廷に訴へ出たのであります。信長の山徒に對する嫌厭は實に甚しかったので、遂に其命を奉じなかつたのである。（御湯殿上日記、朝倉記、總見記）又元龜元年、江州の淺井長政と越前の朝倉兩家に信長が對抗した時にも、叡山が淺井朝倉に味方して、叡山の寺地を淺井等の陣地に貸して、信長を山中に引誘ひ、計を用ひて信長を殺さんとした事がある。然しながら機敏なる信長は如斯淺薄なる計には乗らなかつた。また嘗て信長が叡山に向つて、自分の味方にならぬかと勧めた事がありました。叡山がそれに應じなかつたのであります。斯の如き原因は叡山を焼打する動機となつたものである。信長は遂に元龜二年九月十二日を以て、叡山を焼打したのであります。其の時山の堂塔は残らず焼拂ひ、東塔西塔無動寺の山間谷裏に至る迄焼き盡し、人間は僧侶と云はず俗と問はず、男女老幼殺すこと、其數實に數千に及んだのである。是に依つて、大切の寶物書類等は悉く失してしまつた。後世の史家をして叡山の材料が乏しくて、十分の研究が出来ないのを歎ぜしむるは、實にこれが為である。（中略）而して事實の上に於いて叡山は全滅したのであります。（三河物語、松平記、信長記、淺井三代記、當代記、總見記、言繼卿記、御湯殿上日記）」（前掲書、五七五―五七六頁）と述べて叡山の焼亡を確言されている。近江、越前の淺井、朝倉と叡山の對信長戰略の一端は、實にその主要部分が經濟戰略にあるのであつて、信長が安土に築城して日本海沿岸の越後、越中、越前を経過して琵琶湖運漕による京洛への物資運搬の仲繼地とする目論見が、叡山坂本から湖東越前に散

在する叡山所領地との利害衝突が生ずるのは当然であり、浅井朝倉征伐も叡山焼打ちも経済的視点から容易に理解できよう。安土の城郭都市、港湾都市の維持に欠くことの出来ない條件の充足である。とすれば、所謂叡山焼打ちの実像は文献口碑に伝わる如き徹底熾烈な偶像破壊運動を必要としたのか、と云った視点が改めて吟味されなくてはなるまい。信長が仏教に好意を持たなかった点、石山本願寺との抗争対立にも見られ、「當時の佛僧は、決して名はその實に沿はなかつたので、其實際に立入ってみると、佛徒として僧侶としては、最憾むべき行動があつたのであります。丁度一方の雄を稱する大名と少しも選ぶ所がなかつたのであります。戦國時代は實力の競争でありまして、兵力富力智力の競争時代であつたので、寺といひ僧と云ふも、此實力が競争には非常に敏感なる感じをもつて居たので（中略）信長が天下を統一すると云ふ立場から見ると、寺僧に對し斯く壓迫主義に出たのも亦當然のことと云はねばならぬ。」（前掲書、五七七頁）と云つた状態であつた。戦國群雄霸王の一つに強力な財力と人的資源を持つた天台宗延暦寺や、真宗、一向宗の本願寺の石山、長島の根據地があつた。京都の朝廷公卿と結ぶだけでなく、京洛の社会経済を膺つた叡山と、農民集団を統率して群雄に一揆をもつて對抗した本願寺、特に顕如上人の出現は信長に危機感を与えたこと当然であつたに違いない。

こうして見ると信長の対仏教政策が、宗教思想上の可否と云つた問題ではなかつたので、切支丹イエズス会士への態度も、キリスト教福音よりも彼らのもたらしたヨーロッパの新文明への好奇心から発して、霸王たるべき素質や行動の片鱗のない限り弾圧する要がなかつたと云える。フランシスコ・シャヴィエルの高潔にして質朴な人間味を大なり小なり身につけて、次々と到来したイエズス会士に寧ろ好感を持っていたこと、安土のセミナリオ、祠堂建立の際にもはっきり窺われる。その点、仏教の他宗派、例えば日蓮宗徒や浄土宗徒に対してどのような対したかが問題とならう。

天正七年庚午（A.D.一五〇一年）の安土宗論は浄土宗の僧と日蓮宗の僧が行つたものであつた。宗祖日蓮が法華

経行者として他宗派を論難攻撃して、「真言亡国、律国賊、念仏無間、禅天魔」とボレーミッシュに戦ったことは記憶に生々しい。鎌倉幕府要人が真言律や臨済禅に帰依し好意を寄せた反動として、彼の法難流罪の波瀾の歴史を彩ったが、彼の信者層は下級武士団とやがて歴史の裏面から表舞台に登場する商工業者、漁労海運業者たちがあった。房総の漁民の血を引く故に自ら梅陀羅の子と名乗った彼は、身分制度を度外視した、実利と公益を重視する資質に恵まれて、仏僧の墮落の易行道を非難して、天変地異の頻発と異国来襲の国難を予言して法華経の題目を提起し、常に好戦的態度に終止した。こうした法燈を継ぐ日蓮宗徒は、戦国期の霸王のなかに、亦草莽の臣のなかに支持者を得たろうこと当然であったに違いない。しかも京都の町衆の台頭を契機として、應仁大乱の前夜より本願寺や叡山と屢々武力衝突していた。文明十六年甲辰（A.D.一四八四年）十一月に京洛に土一揆が蜂起したので、日蓮宗院が防戦し屢々本願寺と争擾している。すでに京洛の町衆が日蓮宗に帰依して彼らの根據地としての寺院を建立し、宛かも城郭建築の如き濠と土堀を築いていたに違いない。そのため争乱に備えての自衛軍を組織していたと考えられる。こうした動向は延暦寺僧徒の干渉が始まり、大永四年甲申（A.D.一五二四年）八月六日に、管領細川高国に日蓮宗徒の追放を請うて居り、享祿二年己丑（A.D.一五二九年）に入って延暦寺の僧徒が入京して日蓮宗徒を殺害するに至った。そして天文五年丙申（A.D.一五三六年）七月廿七日に延暦寺僧徒が京都の日蓮宗寺院二十一ヶ寺を襲い焼亡させるに至った。所謂天文の乱と云われている宗門闘争である。一方また法華宗徒は霸王と組んで一向一揆に対抗し、天文元年壬辰（A.D.一五三二年）八月十日に法華宗徒が京都の一向宗寺院を焼打ちし、同十九日に彼らは山城西岡の一向一揆を討伐して、更に同廿四日柳本信堯・六角定頼らが法華宗徒を率ゐて山科本願寺を焼打ちしたため、光教は摂津石山本願寺に退居させられた。天文二年癸巳（A.D.一五三三年）三月廿九日、木澤長政法華宗徒を率ゐて伊丹親興を救い一向一揆を破ったとの記事が散見する（黒板勝美編著「更訂國史研究年表」（昭和十一年六月、岩波書店刊）より抜粋する）。これらの記事を参酌する限り、日蓮宗の

京都を中心とする寺院勢力は、彼の霸王大名の如き比叡山延暦寺や一向宗本願寺派と拮抗する武力集団を擁して居り、祖師の攻撃精神にあやかかって強力な教団組織を持っていたことが推察される。さればこそ浄土宗派と日蓮宗の宗論が安土の信長の面前で行われる気運が醸成されたのだろう。黒板氏の年表に徴すると、文亀元年辛酉（A.D.一五〇一年）五月廿四日、細川政元が日蓮宗と浄土宗の宗論を闘わせた由が見えており、その結果勝敗について知る所がないが、安土宗論の先蹤として興味深い記録であろう。

さてこの安土宗論の逐一は「信長公記」卷十二の、天正七年己卯（A.D.一五七九年）五月中旬のこととして詳細に経緯内容が記録されている（前掲書二七二、二七七頁参照）。辻善之助先生によると、「此宗論は従来傳へられて居る處では、信長の根據地たる安土で、浄土宗の僧と日蓮宗の僧が公然法論を戦はした。結局其時日蓮宗が負けたので、信長は命じて日蓮宗の僧の着て居る袈裟法衣を脱取らしめ、詫證文を納めさせたのである。その趣は信長公記に記してあるが、この書は浄土宗の事を重く見て居る傾がないでもない。近頃史料編纂掛に集まった安土宗論に関する種々の材料を見ると、その真相を察するに難くないのである。之によると従来宗論の記録は、余り原告に偏頗して裁判の公平を缺いて居るのであります。この法論を信長の面前でやった時、其裁判官であったのは因果居士といふ僧であったが、信長は此宗論のある前予め裁判官である因果居士に謂ひ含めて置き、遂に日蓮宗を負けさせたのである。その事情は、前田侯爵家、及び越後の三島郡新野氏の所蔵にかかる因果居士自筆の記録によって明である。これを以て見ると、信長は唯好悪の故を以て、日蓮宗を負けるやうに致したのでなく、政策上から斯の如き事を為したものと思ふ。信長以前の日蓮宗は、本願寺と相互に戦ひ、天文年間に兩細川と争ひ、天文五年に彼の天文の乱を惹起し、叡山の為に京都の二十一ヶ寺の本山を残らず焼き拂はれた事がある。信長は我が前代に日蓮宗が斯の如き経歴を有する事に鑑みて、之を壓へようと思つて、前述の手段を用ひたのである。」（前掲書、五七八頁）と、その勝敗の裏面に伏在した日蓮宗徒弾圧を指摘された。辻先生の件の文章による

と、寺社の弾圧の小さな例が列挙されていて、必ずしも叡山の天台宗、本願寺の真宗、日蓮宗のみではなかったことが判る。彼信長が日蓮宗寺院の本能寺で明智光秀のため誅殺されたのも、偶然に本能寺を宿宮としたのではなくて、永禄二年巳未（A.D.一五五九年）二月二日に入京して將軍義輝に謁した折も、この本能寺に宿泊して居り、彼に斡旋したのが誰れであったのか問題となろう。明智光秀と細川藤孝は足利將軍の股肱の臣であって、永禄十一年戊辰（A.D.一六五八年）七月に義昭と信長との結合に成功し、流浪して霸王の庇護を求めていた意図を察して、越前から義昭を美濃立政寺に迎え、遂に九月二十六日共に京都入りを果たしている。光秀が果して日蓮宗徒であったかは定かでないが、本能寺を信長在京の折の宿舎としたのに一役買っていたのかも知れない。一種の城郭建築を備えていて、京の町衆の能狂言、茶事、音曲藝能、書画骨董の世界を牛耳った人たちの根據地として、本法寺、本圀寺、本能寺などがその雄であったことも見過せまい。わたくしは、本能寺の変が、信長と光秀との私怨葛藤から勃発する見方にかなり以前から疑問視してきた。仮説の域を出さないのだけれど、信長の自由都市堺への介入と関心は、南蛮貿易を中心とする海外貿易に活躍した納屋衆の勃興・台頭が、霸王から天下人への階程で恐威警戒すべき対象でもあり利用を志向したことがあったに違いない。光秀も元龜元年庚午（A.D.一五七〇年）の冬に堺衆との交渉を持ち、種々の点でその後の動向に影響を与えたと見たい。彼らの過半がやがて京の町衆の中核となり日蓮宗徒として、商工業、藝能世界に君臨したのだから、光秀の謀略に加担して蔭で援助をしたその結果と考えているからである。当時の本能寺のみならず本圀寺も義昭入京の砌宿舎としていて、永禄十二年己巳（A.D.一五六九年）正月五日に三好三人衆が本圀寺を包圍攻撃したので、光秀らが防禦し、二月二日信長は義昭のための邸第を勘解由小路室町に造営してやり、四月十四日本圀寺から新第に移っている記録もある。こうしてみると、本能寺、本圀寺いずれも城郭建築を備えた要人宿宮であったことが判り、寄手の光秀も攻手、搦手を熟知していて、襲撃の成算は十分に計算済みだったろうからである。

二、江戸期の日蓮宗と宗徒の動向

天下人信長の退陣から下賤の出自をもつ秀吉の登場となり、安土城の栄華は一朝にして灰燼となり、桃山城大坂城を中心とする絢爛豪華を誇る黄金文化が咲き誇った。その宗教界と秀吉の関係を一瞥すると、戦国の下克上霸王の闘争時代が終焉して、荒廃焼燼した寺院の復興造営が槌音を響かせ始めたので、秀吉から秀頼の時代は五畿内寺院の修理造営が誠に盛んであったのである。秀吉には天正十五年丁亥（A.D.一五八七年）六月十九日に有名な天主教禁令が発せられたが、決定的な弾圧は寧ろ江戸期三代将軍家光による禁圧であった。仏教については例の辻先生の言を引用すると、「秀吉の道德界に於ける功労は非常に大きいのであります。所が宗教界については見ますと、秀吉が出て寺院の再興なり、制度の更定といふ外形の方は出来ましたけれども、宗教の眞髓について見ると、斯界に一大人物の現はれたという事は、不幸にして私は發見することができないのであります。其精神界に於いては、全く萎微して振はなくなつてゐる。それは徳川氏の宗教政策に依つて、基督教との關係上と、本來の關係は非常に喧ましく、檀家制度を定め、勢力範圍を堅く極めまして、決して浸すことの出来ないやうにして居る。そこで各寺院の經濟上から見ても、安心して行くことが出来る様になつたので、遂に一つの型に極められて、江戸時代の佛教は惰眠の時代と呼ばれる様になつた。」（前掲書、五七二〜五七三頁）とある。

信長の安土宗論の浄土宗と日蓮宗の対決を既に見てきたが、秀吉は天下統一から朝鮮出兵への干戈の絶えることがなかったからして、仏教界の宗門論争に介入することもなかった。家康となると、徳川家の菩提寺として家廟を新興都市に造立するため、叡山天台宗と智恩院浄土宗を奉じて、東叡山寛永寺と芝増上寺を庇護するに到った。ここには黒衣宰相と呼ばれた金地院崇傳と南光坊天海の登用があった。彼らの補佐行歴が家光の時代に迄及

んだので、天台宗と浄土宗は幕府の存続する限り最も安泰であったと云える。そのなかにあつて、慶長十三年戊申（A.D.一六〇八年）秋頃に日蓮宗と浄土宗の間に宗門論争が惹つた。このことは辻善之助先生の「日本佛教史」第九卷近世編之三（一九五四年四月、岩波書店刊）第十一節佛教の形式化、其四の慶長十三年日蓮浄土宗論（一九〇～二一三頁）に詳しい。「その發端は尾張熱田の新本遠寺に於て、法華宗の僧常樂院日經といへるものが説法をしてゐたところが、同じ熱田に浄土宗の正覺寺といふのがあつて、この僧俗どもが日經の説法を聞いて、大いに憎み怨んで罵詈を加へ、甚しきは法座に石瓦を抛ち又杖等を以て參詣のものを支へる等の事があつたので、日經は二十三箇條の質問を書いて公開状を送り、論戦を求めたが、正覺寺では之に應じなかつた。（中略）結局徒に雙方の間に争つてゐるよりは、公儀に訴へて裁決を請ふには如かじといふものがあつて、正覺寺の澤道より、清須の性高院玄道より江戸増上寺の源譽にこの事を告げて、日經の廿三箇條を示し、遂に之を駿府の家康の所へ訴ふるといふことになつた。」（前掲書一九〇～一九一頁）その間双方に調停に立つ者があつたが日經が応ぜずに、十一月十五日江戸の新殿で家康の面前で、浄土宗側が増上寺の源譽を始め多数が列座して、源譽の弟子英長寺の廓山が対論者となつた。僧侶側の奉行に岩瀬大長寺の源栄、高野山沙門頼慶が判者となり、幕府側は秀忠、忠輝、池田長政、上杉景勝、蒲生秀行ら老中が皆列席した。一方日經は午後になつても姿を見せず、漸く五人の弟子共と駕籠を飛して城中に入つたが、所芳によつて発言できぬ由を奉上して後日の対論を願つた。所が結局聴かれず対論になつたが質問に返答できず、判者頼慶が浄土宗の勝を宣告し、法衣を剥奪して結着した事件である。この一件も安土宗論の場合と同様なカラクリが伏在していた。増上寺の源譽が家康のお気に入り庇護厚い高僧の触れ込みにかかわらず、「品性が甚だ高くなかつた傲慢な人」であり、又判者の高野山沙門頼慶も且て日經の真言宗誹謗の件で甚だ忌み嫌つていたので、彼らによる正當な判決はもし両者に弁論對話があつたにしても、望むべきもなかつた。剩れ日經の遅延と言語不通は前夜暴漢らに襲われた挙句のことであつて、浄土側が家康の思惑を付

度した非合法的な行為だったことに辻先生が素破抜いておられる。日經その人も日蓮直系の法華行者として他宗派折伏の弁舌に長けていたのみならず、勇往邁進の剛豪であって、治者権威者に決して歓迎されるような人ではなかったらしい。その後も判決に服さず逆に幕府を含めて誹謗したため、捕われて江戸から京都に引廻されて、六條河原で耳鼻を斬られ弟子の一人はそのため絶命するに至った。この法難後も処々を流浪して不施不受派の徒に匿まわれながら、日蓮の辻説法宜しく説法を続けて、元和六年庚申（A.D.一六二〇年）に齡七十をもって越中富山の正覚寺、ないし加賀本覚寺に寂したと伝えられている。法華宗僧の一面と云えようか。

わたくしは江戸期の所謂高僧の姿を追うて「大日本佛教全書」所収の「續日本高僧傳」巻十一を翻読し、巻末の宗派別名索引を閲するに及んで或る感慨を催した。華嚴宗は二人、天台宗十三人、真言宗三十八人とし義寛を一書に浄土宗とする。浄土宗九十五人の多数を算し、臨済宗二十人、曹洞宗五十七人、中に補澤舜山、補道十州の二人を総目で誤って禅澤、禅道とし、舜山は一書に舞山とあるが必ずどちらか一つが誤。黄檗宗十六人、日蓮宗二人、そして末尾に真宗一人とある。元來高僧傳はシナに発して梁の慧皎撰の「高僧傳」十四卷、唐道宣撰「續高僧傳」三十卷、宋贊寧等撰「宋高僧傳」三十卷他を数えるが、その品隲に当って、訳経、義解、神異、習禅、亡身、興福、経師、唱導の別を立てて頌徳している。吾が虎関師鍊の「元亨釈書」三十卷の吾が高僧の品隲は、伝智、慧解、浄禅、感進、明戒、檀興、方應、力遊古徳、王臣、士彦、尼女、神仙、靈恢以下となり複雑な分類を施している。「續日本高僧傳」は法本、浄慧、浄禅、浄律、楽邦邪、感進、檀興、願雜と分類品隲している。わたくしは江戸期の高僧輩出が浄土宗九十五人、臨済曹洞二派の禅宗が七十八名に対して、日蓮宗二名と真宗の一名は忌憚なきの甚しいと歎ぜざるを得ない。日蓮宗は日政元政が挙げられている。城州深草瑞光寺沙門日政傳として卷九浄禅之一に記されている。「釈日政字は元政、自ら妙子と號す。俗姓石井氏、京都の人也、性靈凡ならず六歳にして読書、一度習うと便ち暗誦できた。八歳近江彦根に遊び、武士の習を閑にして、十三

歳で井伊侯に事た。冠年（二十歳）に菩提心を発し、一時泉涌寺が造立されて周律師が法華經を講したので、日政は講義の席に陪座していたが、當に切利天に生るべき文章で、律師が（シナの）法蔵が母を救う因縁譚を挙げて説いたので、涕泣（なみだをなが）して止まなかった程で円座（なみいるふとびと）はこの様を見て貫い泣きした。日政は深く周律師の徳義を慕って直に得度を懇願したが、律師はお前は甚だ年少なので出家に速過ぎると答えた。後八年経過して二十六歳になって自ら髪を下して出家した。妙顕寺日豊に従って師弟ともに修道に励んだ。日に天台宗三大部（智者大師の法華玄義、法華文句、摩訶止観）を閲読して、解釈理解できない文章に逢う毎に、僧俗長幼の別なく質問して研究した。夢に天台大師智者と逢い議論数回することがあったが、これらの異常な感応を匿（かく）して人に語らなかつた。戒、定、慧の三学を研習して、遲滞せず常習したので、日蓮宗門の中で法華經の教義のみに偏著する者たちが、この弊を指弾攻撃した程だ。生平（つれながら）に學問を好み耳目に触れる文章は長く記憶して忘れず、内典外典の書物を涉獵して、日本書紀にも兼通した程だった。嘗て勝地を草深い山に択んで瑞光寺を創設して居住した。その山居の偈に次の如く云つた。「路は千峰万峰を距て柴門は半ば白雲に掩れ閉じている。人間世界の憂樂は我に關係せず、午も寝醒めずに独り松籟を看る」と。常に法衣を脱がずに長年戒律を持って、經を誦誦佛を拝して勤行怠りなかつたので、京都田舎の縋素（ずそう）が噂を聞いて信服した由。日政は熊澤了介、石川丈山、陳元賛らと佛教以外の文人の交を訂して贈答の詩文が多かつたが、中でも清人陳元賛との交渉交誼が厚く、そのため「元々唱和集」が編まれた位であった。日政は眞性孝行で父母を寺側に含（やど）して日々哺養（やしな）を盡したので父は八十七歳で歿し、母もその後同じ八十七歳で卒した。諸々の菩提を弔ひ二七日の冥福追善供養を果した後、俄かに病に臥して自ら回復の見込みないのを知覚し、諸弟子を召集して後日を嘱し、親しく法華經を書写して、首題に弟子慧明に付嘱した上に、和歌一首を詠って安祥として逝去した。時に寛文八年戊申（A.D.一六六八年）二月十八日であった。壽命は四十六歳で門人たちは遺言に従って称心庵の側に葬い、唯竹三本を栽（うえ）て別に塔婆を建立しなかつた。著作に草山集、法華

傳、稱心病課、扶桑隱逸傳など略数十卷があつて、いずれも也に流布している」とある。浄禪傳中の日政は日蓮の遺髪を嗣いた戦鬪的な法華行者の片鱗をだに窺えない。逆に江戸初期の京洛の儒者文人らとの交友があり、「扶桑隱逸傳」の如き儒老の仙者を憧憬して聊かの法華臭味が感じられない。わたくしは幼少期に所謂少年講談本に親炙して「大岡裁判」などを嗜読したことがあつた。享保期の名裁判官の軼事口碑で、多分に西鶴が「本朝桜陰比事」、遡つてシナの「棠陰比事」の裁判公事物の垂流であつたが、当時寺社奉行の管轄にあつた仏教僧らの背徳淫行のため、特に日蓮宗僧侶らの捕縛が記事にあつたのを記憶している。多く不施不受派に向けられていたのかも知れぬが、南町奉行たる大岡の権限内にこうした事実があつたのかどうか、頗る疑問であるが。これを裏書きする資料として次の様な事実があつた。「享保五年庚子（A.D.一七二〇年）江戸雑司谷本能寺日彦等、寺内に遊女を匿し置き、之を若衆姿に粧はせておいた。然るに寺に養ふ所の丁稚庄助が、路上の噂を聞いて、屢々之を口にするを以て、日彦之を厭ひ、庄助を殺して死骸を大塚邊の畑に埋めた。事露はれて八月二十三日、日彦以下刑に処せられた。（未刊隨筆百種、十七所収享保通鑑）」辻善之助著「日本佛教史之研究、續編」（昭和六年一月金港堂書籍株式会社刊）一八、近世佛教衰微の由来、其三、江戸時代に於ける僧侶の墮落、五九五頁）とあつて、こうした破戒僧の典型が拡大して日蓮宗僧召捕断罪として、口碑に伝えられて講釈師の口に登つたのだらう。上記の次に大岡越前守が享保六年四月に芝増上寺所化周隨が師匠の住宅讓状を偽造謀判したことを知り、裁断を下した由が戴せられ、浄土宗僧徒も見逃していない。寛政八年丙辰（A.D.一七九六年）八月二日に幕府が吉原その他の岡場所で非常検挙を行つて、僧侶七十余名を召捕り、日本橋に晒して遠島に処した事件が惹つた。その宗派について触れる所でないが、増上寺の大僧正が寺社奉行へ出頭して御赦免を願ひ出たが却下された由を伝えてゐる。（前掲書六〇二頁）これらから見ても必ずしも日蓮宗僧のみがターゲットになつていたのでなかつたことが判る。

今日の新宗教まがいが無智の衆庶を聚めて反俗行動をする先蹤は、即身成佛や法華往生、御蔵門徒の故事を以てしても司政者の忌避すべき行動と思われたに違いない。（辻善之助著。「日本佛教史」第九卷近世篇之三、第十一節佛教の形式化、其四新義異義の禁止のなかの、「信仰の現實墮落」の項、一八〇〜一八七頁）他の多くの宗派が大江戸八百八町に大小となく存在した寺院、寺町の僧徒の数は莫大だったろうと推算されるが、江戸より京都各宗派人数が辻先生によって記載されているので掲げると、先づ寛文五年（A.D.一六六五年）と下段延寶二年（A.D.一六七四年）

天台	一、一五六人	一、一九〇人
禪	一一、〇四六人	一一、〇一六人
真言	一〇、四七二人	一〇、〇七〇人
浄土	一〇二、八八〇人	一四〇、一一八人
法華	八一、七四二人	八三、七〇四人
西法願寺	四〇、五二二人	四一、五八二人
東本願寺	四〇、二八六人	八〇、一二〇人
高田	八、一二〇人	七、四〇六人
佛光寺	七、四一〇人	八、五三二人
大念佛	九、四〇〇人	二八〇人
律	八、三〇三人	九、九一二人
法相	九、二二六人	五、四〇〇人
山伏	六、五七三人	一、〇七三人

と東日記、玉露叢、慶延略記などに依るとする。享保通鑑には享保六年（A.D.一七二一年）度の宗派人数がある由だが先生は省略せられた。右の表に見る限り浄土宗信者は段突で十万人、両本願派が八万人、次いで法華宗徒が八万人弱となつて、京都町衆が法華門徒であつたことが推察される。恐らく江戸の町も略これに類したのかも知れない。元来江戸開府以来、將軍のお膝元だけあり幕府政策の参勤交代制による大名の移住と旗本八万騎からなる武家が過半を占め、八重洲・日本橋筋から隅田河畔が商工業者所謂町人が増集した所で、その実数を把握するのは難しく、江戸膨張の極盛期に人口百万を越え増加したが、日蓮宗徒は池上本門寺を中心に市中に可成りの数を算したに違いない。「武江年表」（大正十四年一月、國書刊行会刊）卷一、慶長五年庚子（A.D.一六〇〇年）池上本門寺大塔建立、翌年完成の記事を録している。同年表によると、寛永七年庚午（A.D.一六三〇年）二月に房州小湊誕生寺にあつた日蓮布引祖師像が牛込幸國寺に移座したこと、同四月二日に身延久遠寺日蓮が池上本門寺日樹とが宗論をして、本門寺側が敗れて日橋が信州飯田に配流された記事が見られる。身延と池上との対立抗争があつたことになり、法華門徒間に不施不受派に絡んだ闘争があつたに違いない。寛文六年丙午（A.D.一六六六年）三月不受不施の僧配流、天和元年辛酉（A.D.一六八一年）日蓮上人四百年忌として法華宗寺院法会が江戸市で行われた。元禄四年辛未（A.D.一六九一年）四月、碑文谷法華寺、谷中感應寺、市谷自證院、法華宗悲田派を改め天台宗となる。とあつて天台宗に改宗した事件を記している。これも日蓮宗への圧迫か。その七月に日蓮宗悲田派の僧たちが伊豆島に配流されているが、天台宗へ鞍換えを肯じなかつた僧らの断罪と考えられる。文化四年丁卯（A.D.一八〇七年）六月二十日、中平井村百姓文六といふ者、逆井村の川面にて蛭を取るとて、籠の内に日蓮上人像を得て、平井妙光寺に納めた。それより遡る享和三年癸亥（A.D.一八〇三年）八月谷中延命院住持日道、僧律を犯し嚴科に処されしと聞えし、〔筠庭云、延命院は大事件なり。〕七面の四方八面尻が割れ工面違ふて顔は洪面」とある。この詳細は又辻先生によって伝えられている。「享和三年七月二十九日、谷中延命院

住持日道が斬に処せられた。日道はもと俳優であったが、身を匿すべき事あって、僧となり延命院に住し、生来の美貌を以て、法談に事よせて女人を勾引し酒筵を設け、江戸大奥其他三家大名等の女中を誘致し、通夜と称して寺内に止宿せしめ姦通に及んだ。其寺の中に居室を構ふる事奇巧を極め、回転屈曲人その深奥を知らず。因って淫行を恣にし西丸大奥梅村の下女志乃を懐妊せしめ、墮胎の薬を飲ましめなどした。事露はれて寺社奉行脇坂淡路守の手に捕へられ、遂に処刑せられたのであった。納所柳全は新吉原五十軒道源太郎母里女と密通により晒の上、觸頭ふれじうに渡し、寺法の通り取計はしめた。日道と関係のあった婦女も押込叱り等の夫々処分せられた。（續霸王代一覽、武江年表、甲子夜話、森山孝盛日記、寶曆現來集）この事件は小説に作られ「觀延政命談」と称して世に行はれてゐる。」（前掲書、六〇二〜六〇三頁）と顛末が詳細に伝えられ、当時筠庭をして大事件と呼びしめた、千代田大奥、御三家、大名の奥女中らを巻き込んだスキャンダルだった。

三、柴又帝釈天題經寺が事

すでに東都での日蓮宗寺院の動向の一端を垣間見たが、「武江年表」の安永八年己亥（A.D.一七七九年十一月二十三日、葛西柴又村題經寺、九世日敬の時、今年堂宇を修理せしに、本堂の棟上より今の帝釈天の板本尊を得てこれを祀る、是當寺に傳へて先年失ひし本尊也。この日庚申に當りしかば、これより庚申の日を縁日として詣人多し」とある。今日柴又帝釈天は山田洋次監督による「男はつらいよ」の一連の映画の主人公、車寅次郎が題經寺の産湯を使った香具師ゆかりしの出身地として喧伝されている。江戸川河畔に在って対岸は下総松戸宿、また中山法華經寺を指呼の間に望む処に位置してもいる。恐らく江戸期は江戸川水運の利便があつて、街道宿場、商人、運送納屋衆などを信者としていたと考えられる。この板彫帝釈天像は異様な風軀を線刻で彫り凹めてあり、板面に

墨を塗って紙を当てて刷った一種の版木で、恐らく極めて粗荒な造形表現故に当山の僧侶による素人細工を思わせる所がある。刷り仏として販布したと思われるが、この版木本尊が出開帳をしている記事が「武江年表」に見えている。天保六年乙未（A.D.一八三五年）「七月より浅草本蔵寺にて柴又村題経寺帝釈天板本尊開帳」とあって、下町の商人、職人、また御徒、茶坊主ら信者を聚めたのだろう。開帳の法華宗徒の姿の一端は、「武江年表」の寶曆三年癸酉（A.D.一七五三年）「三月十六日甲州身延山祖師開帳に付、江戸到着の日、迎ひの人数品川より日本橋迄つゞく、何町講中と書たる旗幟あまた立る。開帳講中此頃より賑へり。四月朔月より深川浄念寺にて開帳」とある記事から推察され、講中が町名を記した旗幟を押し立てて繰り出し練り歩いた活境が見て取れるし、開帳中浄念寺境内の賑盛が忍ばれる。更に時代が幕末期に及ぶが安政四年丁巳（A.D.一八五七年）同じ深川の浄心寺（この寺の開創が萬治元年戊戌〔A.D.一六五八年〕日義上人によってなされた）において甲州身延山祖師、七面宮開帳あり、「参詣群集し、毎朝未明より開門を待て参詣す。講中の輩神事の時持出る萬度といふものの如く、思ひ思ひの行燈を作り、燈火を点じてこれを担ぎ、群をわかちて一様の衣類を着し、太鼓を打ち題目を唱へて往来すること絶へず」と具体的に描写されている。帝釈天板絵本尊の開帳でも恐らく団扇太鼓と華美な万燈、揃いの衣服で繰り込んだに違いあるまい。

日蓮宗寺院が帝釈天、摩利支天、鬼子母神の俗信仰の天部像を安置して、題経寺よりも柴又の帝釈天として知られるように、出村本仏寺が入谷の鬼子母神、下谷の徳大寺が摩利支天と呼ばれ、厄病天災難の退散の帝釈天、安産子育ての鬼子母神、障難を除滅して利益を施す守本尊として武家の尊崇を集めた摩利支天が人気を博している。宗祖日蓮上人の像は甲州身延山は元より、同じ甲川鵜澤経王寺の祖師像、安房東條小松原鏡恩寺の祖師像、又駿河岩本の像が次々と江戸の日蓮宗の寺院で開帳されたことが、延享四年丁卯（A.D.一七四七年）二月より三月にかけて下谷法養寺、浅草八軒寺町本法寺、牛込七軒寺町久戒寺で御開帳が行われた由を武江年表に記載されて

いる。子安鬼子母神が同じ頃谷中の一乗寺で開帳、寛延二年己巳（A.D.一七四九年）谷中長蓮寺蔵の鬼子母神開帳、同年八月雜司谷鬼子母神境内で、孝女くめといふもの、麥藁にて作った角兵衛獅子を売始めた由で、筠庭の注に「麥わらの角兵衛獅子のことは江戸塵拾といふ写本に出たり。されどこの草紙の説、肯がたき事多ければ、この久米といふ女の作初めしといへるも如何ならん。但し太凡は此頃よりし出し手遊びなるべし云々」（武江年表）。明和三年丙戌（A.D.一七六六年）四月朔日より谷中宗林寺（船守彌三郎守本尊の）鬼子母神、祖師天満宮を開帳、文化五年戊辰（A.D.一八〇八年）二月十七日より本所本佛寺蔵鬼子母神を開帳、天保六年乙未（A.D.一八三五年）四月より目黒正覚寺の鬼子母神の開帳、等々鬼子母神の開帳記事が年表中に散見していて、子育て、疱瘡除けの俗信仰が盛んだったことが判る。摩利支天の開帳記事は下谷徳大寺の本尊摩利支天が、安永七年戊戌（A.D.一七八八年）、四月八日より、文化十二年乙亥（A.D.一八一五年）七月十六日よりの開帳の記事で年表より知られる。この徳大寺は現在もJR線御徒町駅近くにあり、彼の所が幕臣下級武士所謂御徒おかしの住居地であったから、多分に彼らの尊崇を得ていたに違いない。文豪幸田露伴の先考利貞もこの近くに居住したお茶坊主出身であって、下谷三枚橋横丁に居り、摩利支天の徳大寺近傍であったのみならず日蓮法華門徒であった。「仏間には上段が祖師日蓮、右手に鬼子母神、左手に摩利支天、それらが家廟とともにあった。その次の間には大神宮を祀り、そのまた次の台所には荒神様の棚がある。妙見様、愛染様、七面様、大黒様もあり、歴代天皇のお名前を記した軸や清正公様もある」（塩谷替著「幸田露伴」上巻（昭和四十年七月、中央公論社刊）父母までの項、二〇（二一頁））しかも神仏への御膳供養は幼き露伴成行の役目であったと云う。塩谷氏の記す所に従うと、「大神宮には腰高が二つ、お仏器は荒神、鬼子母神、摩利支天へ一つずつ、お祖師様へ五つ、お茶を添えて御膳をあげ、先祖の命日には御糧供をあげる。御糧供に味噌汁に茄子か筍の煮たのであっても御膳立をするのである。（中略）亥の日には摩利支天へあげる数をまし、一日、十五日、二十八日には妙見様へあげ、愛染様、七面様にも月に三度はあげる。ま

たその他に今上天皇へお初穂を供へ、祭日には数を増す。二十四日には清正公様に供える。そのほか、大黒などもあって、祖母は決して忘れるということがない。余程早く起きなくては学校へ行くのが間に合わなくなる。礼拝が終るまで誰も膳に向うことができない。夕がたになって燈明をあげたのも露伴である。(中略) 祖母は厳格で規則立って潔癖で義務は必ず果す人で祖父や先祖の墓参はよくした。浅草菊屋橋の正覚寺という寺であった。宗旨は法華である。柴又の帝釈天へも行った。その時連れで行ってもらうのが露伴の時たまの楽しみであった。」(前掲書、三〇～三一頁) 幕末から明治初頭のお坊主衆の宗教生活の雰囲気伝えるものとして、特に法華宗徒の日常生活の一駒が窺える資料と云えよう。下谷から葛西柴又の題経寺詣での道筋やら帝釈天の当時の姿も記述されていないが、恐らく庚申の日に詣でたのではあるまいか。

題経寺の本尊板彫帝釈天像が、既に記したように、安永八年己亥十一月二十三日に本堂の棟上で発見されたが、当日が庚申の日であったので、縁日として参詣人を聚め賑ったのだが、この庚申待ちの俗信仰を利用したこと論を俟たない。宇井伯寿監修「佛教辞典」(昭和八年三月、東成出版社刊) 庚申会こうしんえの條に、「また庚申祭、庚申待、俗間にて庚申に當れる日の夜に青面金剛(庚申天とて帝釈天王の使者)の像を本尊として三猿(見ざる、聞かざる、云わざる)の像を祀り、祭供を設けて夜を徹して庚申を守ると称して、以て罪過を免るる儀とす。もと道家に於て、人身の三尸蟲が睡眠中に上帝に至り人の罪過を訴ふるといへるより、夜を徹して之を守るの風が佛教に入つたもの」とある。庚申の日は帝釈天の随神化身の青面金剛が祀られる日なので、帝釈天にあやかっただけで縁日としたのであろう。今日に於てもその風習は伝承されている。併し題経寺の日蓮宗としての面目はこれのみではない。帝釈堂(本堂)内陣の外側壁の十枚の羽目板に所謂法華説相図が深浮彫で裝飾されて、参詣者に観覽させ法華經の絵解きにも利用された形迹がある。寺伝によると、当山第十六世観月院日済上人の発願の由である。しかもその図柄は京都にある立本寺に伝わる法華經變相図を参照して、下谷車坂町に住んでいた、英州画工が描いた

ものを基礎にしていると伝えてもいる。京都上京区内野にある立本寺は吉田東伍先生の著作「大日本地名辞書」(上方)山城、上京の項に、「内野一番町に在り、日蓮宗、元亨元年僧日像之を四條大宮通の西櫛^{しり}に開基し、櫛^{しり}寺龍華院と曰ふ。家中の一本山にして法華の名刹とす。後五転して寶永五年此に移る。」と見えているが、寺宝遺品について触れる所がない。望月日翔師が法華經説話彫刻の縁起に関して題經寺教報「柴又」に、「木彫シリーズ」と題して1号から5号に涉って、搗わった彫刻師の紹介を目的として関係者の座談会を記録している。そのなかで、この法華經説話彫刻の下絵について、「京都の立本寺という本山に『法華經文字宝塔』という、法華經の文字で宝塔を画いた文化財があるんですが、その脇に法華經の説話が画かれているんです。それからヒントを得て画いたというのですが、私の拝見したところ、帝釈堂桐羽目彫刻の図柄の方が、よく出来ていて、これはオリジナルであると言っています。」と言及せられた。

帝釈天内陣外側の桐羽目に彫出された法華經变相図十面の内容と作者は次の通りである。

- (一) 法華經序品第一、日月燈明佛と八王子出家の図。俗に塔供養図、金子光清作。
- (二) 法華經譬喻品第三、俗に三車火宅の図、木嶋江運作
- (三) 法華經藥草喻品第五、俗に一雨等潤の図、石川信光作
- (四) 法華經普賢菩薩勸発品第二十八、俗に法師修行の図、横谷光一作
- (五) 法華經見宝塔品第十一、俗に多宝塔出現の図、石川銀次朗作
- (六) 法華經提婆(達多)品第十二、俗に千載給仕の図、加府藤正一作
- (七) 法華經提婆(達多)品第十二、俗に竜女成佛の図、山本一芳作
- (八) 法華經藥王菩薩本事品第二十三、俗に病即消滅の図、今関光次作
- (九) 法華經常不輕菩薩品第二十、及び藥王菩薩本事品第二十三、俗に常不輕菩薩受難の図、小林直光作

法華經功德の図（衆生の苦悩を救い渚の願いを充たしめる利益を十二の喩を以って説く、渴乏の者が清涼池を得、寒き者が火を、裸の者に衣を、子が母を、渡りに舟を得る様を描く）とも云う

（十）法華經陀羅尼品第二十六 俗に法師守護の図（畏沙門天とその眷属。十羅刹女と鬼子母神らの法華經修行者を守護するを描く）。加藤寅之助作

からなっている。既に触れたようにこの変相図下絵が高山英洲師によって描かれたもので、十人の木工師に夫々手渡されたについて、彼らが夫々自ら図柄を選択したのか、或いは宛がい扶持であったのかの事情は定かではない。大正震災直前に各木工師のアトリエで製作に入ったのだが、彼らのアトリエが過半東京下町にあったので、殆んど焼亡してしまって、僅か木嶋江運師の三車火宅図のみ残ったと伝えられている。大正震災は江戸残滓の全てと前期東京の風物世態人情の全てを消滅せしめたので、彼ら宮大工、細工師の伝統も生命、命脈を絶つかに見えたが、題經寺管主日済上人の発願熱意とパトロン鈴木源次朗氏を中心に、当時東京在住の彫刻師らを翕合して昭和九年に完成したものであった。幕末から明治初頭の市巷に腕を磨いていた木彫師の姿の一端は、詩人高村光太郎の先考高村光雲師の「高村光雲懐古談」（田村松魚筆録、昭和四十五年十二月、新人物往来社刊）に詳細に触れられていて、大正、昭和のこれら法華經変相図作者たちの祖父伝来の職人氣質と、その行動を追感するこよなき資料と云えるであろう。勿論、幕末から維新の変革が彼ら江戸名人に与えた影響は、一方においての廃仏棄釈運動のなかで仏師としての創作活動を萎靡停滞させたのみならず、日々の糊口の資に事欠く生活だった。光雲師の師匠東雲も御多聞に洩れなかったのは云う迄もあるまい。この神仏分離政策の煽りの一端として、本所五ツ目にあった五百羅漢寺の衰滅経緯の挿話は種々の教訓を含んでいる。

「本所の五ツ目に天恩山羅漢寺というお寺がありました。その寺内に螺螺堂（かたかた）という有名な御堂がありました。形は細く高い堂で、丁度螺螺の殻（か）のようにぐるぐると廻つつ昇り降りが出来ると廻つた昇り降りが出来ると、三層

位になっていて大層良く出来た堂であった。もし今日これが残っておれば建築家の参考となったであろう。堂の中には百観音が祀ってあった。上り下りに五十体ずつ並んで、それはまことに美事なもので、当時の五百羅漢と並んで有名であります。

この百観音は、羅漢寺建立当時から、多くの信仰者が、親の冥福を祈る為とか、愛児の死の追善の為とか、いろいろ仏匠をもつての關係から寄進したものであって、いずれも中流以上の生活をしている人々の手から信仰的に成り立ったものであります。それで、各自にその寄進の観音をば出来得るだけ旨く上手に製作こしらえて貰おうというので、当時、江戸では誰、どこでは誰と、その時々ときどきの名人上手といわれている仏師に依頼して彫らしたもので、それが一堂に配列されるのであるから、自然と自分の寄進したものが、他より優れているようにと、一種の競争心を生じ、一層このことに熱心になるといふ傾向かたむきを為します。一方依頼された仏師の方でも、各名人達の製作が並んで公衆の面前に開展されることありますから、これも腕うでに綬ゆいをかけるという風に、技倆一杯に丹精を凝らし、報酬の多寡などは眼中におかないという有様となる。そしてその寄進された観音には京都の仏師もある。奈良の仏師もある。江戸の仏師が多分を占めてはおりますが、いずれも腕揃いであって、凡作は稀で、なかなか結構でありました。そしてそのなかには、五百羅漢を彫った当羅漢寺の創建者である松雲元慶禪師の観音もありましたこと故、私の修行時代は、本所の五ツ目の五百羅漢寺といえ、東京方面における唯一の修行場であって、よい参考仏が一纏りになって集っていたのでした。」（前掲書、一一九—一二〇頁）こうした條りを記していると、わたくしはゆくりなくも京洛七條の蓮華王院三十三間堂の一千一鉢を安置する千手観音像を想起する。院政期から鎌倉中期に渉る慶派、院派、円派の名仏師による観音象の陳列場の趣きがあり、堂上貴族紳縉をパトロンとする作品群からなっていて、今日も尚その偉容を誇っている。本所五ツ目の五百羅漢寺の蝶螺堂の百観音は、江戸町人をパトロンとした規模も作家の質も卑賤低俗ではあつたけれど、光雲ら江戸仏師、木彫師らの修業研鑽の場

だったこと、特筆大書に価しよう。しかし時勢の変遷で五百羅漢寺も蝶螺堂も廃滅の危機に瀕して、百観音像も下金屋に二束三文で売却されて焼却の憂き目に逢うに到った。そこで光雲と師匠の東雲がそのなから五鉢を救出購買している。その経緯は次の様に語られている。

「私の見つけ出した観音様の中には、細金（戴金さりがね）の精巧なものがある。これは京都仏師七条左京の作。また天狗長兵衛と綽名のある名工の手の籠かごんだ作がある。それから羅漢らかん仏師松雲元慶もとあき禅師の作がある。けれども、それらが御首みくしや、手や脚や、台座、天冠てんくわんなどが手荒らに取り扱われたこととて、ばらばらになっているのを、私はまた丹念たんねんに探し廻めぐって、やっとどうにか取揃とぞろえました。（中略）さて五体の観音は師匠の所有に帰し、まあ、よかったと師匠と共に私は一安心しました。」（前掲書、一二五—一二七頁）。そして光雲はそのうちの松雲元慶禅師の観音像を師匠から頌ほめけて貰もらい守り本尊とするに到った。

明治期の仏師木彫師の伝統は高村光雲によって護持伝承されるに到り、後の美術学校の木彫主任として活躍し、今年の干支えとに因よりて紹介された東京国立博物館所有の“猿”を始め、上野公園の西郷隆盛像や楠正成騎馬像などに彼の技藝が伝えられ、他方美術学校アカデミーから多くの作家たちを輩出したこと周知の通りである。他方、帝釈天本堂の多宝塔出現図を彫った石川銀次朗師は高村光雲との知遇を得て、彼の楠公像の木型彫刻の下請けをしてもいた。帝室技藝員だった光雲が当時不遇であった石川師への友誼の一端だったとも云われている。塔供養図の金子光清師も法師修行図の横谷光一師にしても、明治文明開化による横浜輸出貿易の花形となった象牙彫り、所謂いわゆる牙彫り細工師の伝統の上に立っての彫刻技術の冴さえが見られるのは当然で、江戸から前期東京の生粋な下町職人の気質がまざまざと生きているのが感ぜられる。大正から昭和に僅か残った帝釈天堂の法華経変相図こそ、かつて五百羅漢寺の蝶螺堂の百観音像が、高村光雲師の修行場、教場であった如く、現今にあって少数の木彫作家たちにとっての展示場、教場となるに違ちがいない。

近世日蓮宗の仏教文化史上の意義（杉山）

五

（平成十六年甲申二月 摺筆）

Summary

The Significance of the Premodern Nichiren Sect in the History of Buddhist Culture

Jirō Sugiyama

The Nichiren or Lotus Sect, founded by Nichiren 日蓮 (1222-1282) as one of the new Buddhist schools of the Kamakura Period, is based on the recitation of the title of the *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*. 'Homage to the Lotus Scripture of the Wonderous Law' 南無妙法蓮華經 was proclaimed as the supreme form of veneration of the Truth, and this new teaching, in spite of the strong polemic tone against other sects, had the advantage of being easy to understand and practice. Many of the believers of the Nichiren Sect came from among lower samurai class, fishermen, merchants, and artisans, who in more recent periods became very active in the cities of Kyoto and Edo. Their chief temples in Kyoto were Honpō-ji 本法寺, Honkoku-ji 本圀寺, Honnō-ji 本能寺, while Ikegami Honmon-ji 池上本門寺 was their main centre in Edo. They often engaged in strong debates with the Shin 真宗, Pure Land 淨土宗, and Tendai 天台宗 Sects. In this paper, I analyse from the viewpoint of the history of Buddhist culture the role of such temples and their believers, with a special focus on Shibamata Taishakuten Daikyō-ji 柴又帝釋天題經寺.